

パーソンズの理論とその経験的適用

井 森 陸 平

1 理論枠AGILによる社会調査技法の考察

1 型変数複合としてのAGIL

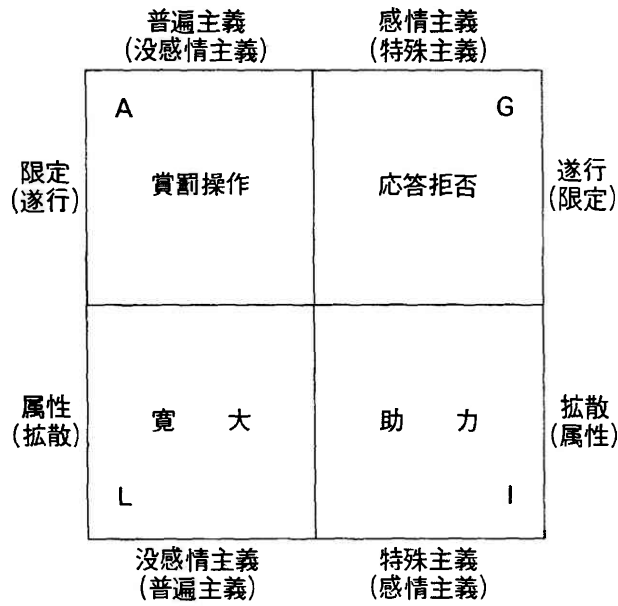
パーソンズのAGIL理論枠は、元来社会歴史の経験的研究に対し寄与することを意図するものであり、そして、実際にもその事例に乏しくないのであるが、ここでは、少し型破りのようでもあるが、社会の研究方法、特に社会調査法の分類、説明について、その適用を試みたいと思う。意図するところは、理論的研究では単に社会歴史的事実の異なる諸次元様相を分析弁別するにとどまり、これをいかにして捉えるかの方法を提示するに至らない難点があるので、それぞれの様相に適合した、経験的技法を示唆することによって、理論と実証との統合を期すると共に、他面、とかくまとまりのない、雑然とした状態におかれている、多種多様な、実証的、特に社会調査的方法を整序し、系統づけようとするにある。

考察の便宜上、初めに、すべてを尽くしたという訳ではないが、筆者が実地に使用しており、その結果のデータも利用できる社会調査の諸手法につき、その主なものを、後述の如くそれぞれパーソンズの理論枠AGILの各次元に対応配置してみた。その対応状況の説明に入る前に、その準備として、パーソンズのAGIL理論枠の概要について解説する。四つの次元に分ける、という大枠は、R. ベールズの相互行動過程の実験的研究における、考察枠から暗示されたものであり、また、各次元の意味内容の厳密な規定は、『一般行為理論を旨として』⁽²⁾において創案された、自己を対象に対してとるべき志向態度の選択の仕方、型の基本という意味の、型変数 (Pattern variable) を基礎として、幾度かの推敲吟味を経てなされ、最終的にきまったところは、次のように要約せられる。元来、型変数は5つであるが、これらすべてを二極対置すると、32の組み合わせができ、上掲書やパーソンズの『社会体系』にはこの種のものもみられるが、理論的研究上ではともかくとして、⁽³⁾実証的研究上の枠組としては、複雑過ぎて、到底使いこなせないなので、これを簡約にするために、何らかの工夫をしなければならないことになる。

一度には、2変数を使えばよいともいえるが、それでは問題の事象を十分解明するには足りないために、必要なだけの型変数は使いながらも、その結果、生じる組み合わせの数は、処理し得ない程多くなならない、といった方法が要求されることになる。筆者が、A. H.

バートンの『社会調査における属性空間の概念』なる論文⁽⁴⁾から示唆を受け、波多野鶴吉の経営理念の分析に当り、組み合わせの数は常に使用される変数標識より1つだけ増えるという、仕組みのL.ガットマンの尺度分析の発想をかりて、型変数を3つ使って、組み合わせの数は、2つの場合と同じく4つにとどめたような方法も一応考えられるが、⁽⁵⁾これには種々の難点もあり、簡約化という点からも、使用される型変数が3つまではよいとしてもそれ以上になると多過ぎはしないか、と懸念ももたれる。

パーソンズでは、当初の5つの型変数の中から自己志向対社会体志向(Self-orientation-Collectivity-orientation)を除き、残りの4つの型変数を2つづつ一括して、2つの型変数複合が作成され、これらを両極対置すると、4つの組み合わせができるが、これが外ならぬAGIL枠ということになる。かくて、それにはまた難点の伴うことも免れないが、ともかく、理論的並びに実証的研究における、型変数の有効性が、一段と増すことになるといえる。後段、社会調査の諸手法と対応させる場合の参考にもなるので、型変数から型変数複合を経て、AGIL枠が構成される手順の概要を記してみる。先ず基本的要素である、型変数から初めると、初期の『一般行為理論』と後の『作業論文』とは異同があり、必ずしも一貫していないが、自己志向対社会体志向を除く、4つの型変数に限っていうならば、一方における、自己を対象に当面して、とるところの志向態度を標準として区別される感情主義対没感情主義(Affectivity-Affective neutrality)と限定対拡散(Specificity-Diffuseness)との、対象に対する態度ともいえる型変数群と、他方における対象の存在態様の如何を標準として区別される、⁽⁶⁾普遍主義対特殊主義(Universalism-Particularism)と遂行(行動表出)対属性(Performance-Quality)との対象の特徴づけともいえる、型変数群との中の、それぞれ1つづつが組み合わさって、いくつかの型変数複合ができるがそれらの中経験的妥当性を考慮して、普遍主義・没感情主義対特殊主義・感情主義と限定・遂行対拡散・属性との2対が問題にせられる。そして、これら2つの型変数複合が⁽⁷⁾組み合わさって、4つの型ができるが、これがAGIL枠組と称せられるものである。この枠組は一応、行為体系の機能次元と解されるものであるが、これと型変数との関係をいうならば、第1図の如く、外界適応(Adaptation)を意味するAには、型変数複合普遍主義・没感情主義と限定・遂行、目標達成(Goal-attainment)の略語であるGには、感情主義・特殊主義と遂行・限定、統合(Integration)に該当するIには、拡散・属性と特殊主義・感情主義、そして様式保持(Pattern-maintenance)を意味するLには、属性・拡散と没感情主義・普遍主義がそれぞれ対応する。上述の構成手順からも分かるように、対角線上にあるAIとGLとは、2つながら型変数複合を異にするが、他方AG、GI等の隣接するものでは、その1つを異にするが、他の1つを共通にすることになる。また、この概念枠は、現実の大要をおさえたものであることは確かであるが、しかし実際には、型変数の、これとは異なった組み合わせも存するのであり、現実をそのまま示



備考：かっこ内のは副組成型変数。

第1図 型変数と行為体系機能次元(A G I L)との関係

すものではなく、むしろ現実理解のための用具として、理念型的な機能をもつものと解さるべきであろう。

2 G次元と自由回答法

以上の解説を念頭において、今日の社会学界で、経験的方法の主要なものとして一般に用いられている、社会調査の諸技法を、AGIL枠に対応配置させる、本来の課題に進みたいと思う。順序は逆のようであるが、考察の便宜上、Gに対応するとみなされる、社会調査の手法から初めることにする。これには、問題なく自由回答法が該当するように考えられる。なぜなら答え方を指示したり、限定することなく、自由に思うところを言うやり方であるので、先年、或る会社で実施した面接調査の際、一人の女子事務員に、「あなたが現在一番ほしいと思うものは何ですか」と尋ねたところ、即座に、ボーイフレンドという言葉が口をついて出たように、切実に欲しながら満たされないものが洩らされるはけ口になったり、また、田舎町での調査の折、聞きもしないのに、老女の口から嫁さんの事が色々聞かされたように、日頃の心のわだかまりが発散される機会にもなることが少なくないのであり、そして、これを型変数の観点からみると、ここで、一番問題なのは自分であり、また、感情、欲望であるということで、特殊主義や感情主義と相通じる一方、心の裡の、一途に思いつめた一つの事が、調査をきっかけとして、言葉となって噴出するというので、問題なく限定と行動表出遂行に該当し、そしてこれらはG次元を組成する、型変数に外ならないからである。かように、自由回答法では、事柄の意味内容、換言すれば情報だけではなく、精神状況、換言すれば、心的エネルギーの態様が捉えられるとした

ならば、ここでの無回答は、或る種の精神状況の欠如の指標ともみなされる筈であるが、その詳細については、別の機会に述べたい。

3 A次元と投影法、目盛法

次には、概念枠Aに対応するとみなされる社会調査の手法に移るが、一応投影法がこれに該当するのではないかと考えられる。この方法は、答え方が明確に指示されないのみならず、調査の本当の主旨が回答者に知らされない、ということの特徴としている。限定、とりわけ行動表出という、型変数からは、さきの自由回答法と変わらないけれども、回答者本人のこととしてではなく、他人のこととして聞かれるので、自然、特に内輪の私事にわたる事柄では警戒心も解け、それだけに、我執を離れた、感情抜き立場から、比較的冷静客観的に考えて、答える傾向があり、この限りでは、さきの自由回答法の場合とは、型変数の反対の側の対である、普遍主義・没感情主義とかかわりがある、とみなし得るであろう。尤も投影法の意図するところは、人には自分の思うところから推して、他人の思いを想像する、という投影の原理に基づいて、他人のこととして答えたところから、回答者自身の考えを推測しようとするところにある、ということからすれば、とりわけ自分の思うところから推量するなどというのでは、客観的普遍主義的ではなく、特殊主義的ではないか、という疑義がもたれることになる。これについては、成程、自分の思うところから推量するというので、私が出てくるのは確かであるが、しかしこの場合の自分というのは、ただ情報源としてに過ぎず、むしろ警戒心がないだけに、我が身という、執念はなく、心的エネルギーの上からは、必ずしも特殊主義的とはいえない、と応えられるであろう。

なお、部分的には、直接法の中でも、答え方を言葉で指示することなく、例えば1から10までの数字を並べた目盛の、いずれかの箇所を指摘させるやり方も、理論枠Aに対応するのではないかと考えられる。例えば、夫婦や嫁姑の間柄のことを問うような場合、もし答え方を、非常に円満、円満、何ともいえない、よくない、全くよくないという如く、指示するならば、答えは、体裁を考えて、殆んどの者が非常に円満とか、円満で、残りはせいぜい何ともいえないどまりで、よくないや全くよくないは皆無であるとか、また、階級意識の調査の場合、答え方を上、中、下と明示するならば、本当の謙虚な気持からか、世間の目を気にするためか、殆んどが中か下で、上は皆無か、殆んどいうに足らない程度である、などのことに当面するが、他方、中性的な数字からなる、目盛法を使用するならば、円満とか上とかの言葉のもつ刺戟からくる、抑止力が除かれて、気がねなく、本当の心の内が洩らされるようになり、かくて答えも、一部に偏らず、広く分散するようになり、この限りでは、型変数複合からみても、一応A次元を組成する普遍主義・没感情主義と相通じるものがある、といえるであろう。

次に、目盛法について、筆者が試みた調査の事例を挙げてみる。郡是製糸の元工女の面接調査の際、家族の間柄に関する項目では、夫婦の間柄を例にとると、初めに、「あなた

第1表 夫婦の円満度

円満度	非円常に満	円満	何ともいえない	余りない	よくない	分からない	計 %	実数
	10.4	58.6	6.9	0	0	24.1	100	29

第2表 夫婦の円満度（目盛法）

円尺満度度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	分なからい	計	
												%	実数
	10.4	0	48.2	20.7	10.4	3.4	0	0	0	0	6.9	100	29

方ご夫婦の間柄はどうでしたか」と問い、非常に円満、円満、何ともいえない、余りよくない、よくない、分からないの中から、答えを選ぶ方法を用いた後、すぐ続いて、目盛を見せ、どちらの方向が円満かどうかということだけ教え、どこかの箇所を指示させるやり方を適用した。結果は、第1表のように、言葉で答え方を指示した前者の様式では、無回答が4分の1近くもある上に、非常に円満と円満とではほぼ7割になり、残りは、何ともいえないがやっと7%程で、余りよくないやよくないは皆無という、世間体向けとしか解され得ない、横範回答に終わっている。他方、目盛法では、第2表の如く無回答が7%足らずと、さきの3分の1以下に減ると共に、答えが1から6の箇所までとかなり分散し、分布の状況からみて、さきには皆無であった、余りよくないまたは、よくないと判定されるもの、すなわち5、6の箇所のものが14%近く見出され、これに、何ともいえないに該当すると推定される、4の約21%を合わせ考えると、大体真実に近いところが出ているように思われる。

昭和30年頃、金沢市での階級所属意識の調査の際、「学者の説によると、金沢市のような都会には、上、中、下の3階級があるといいますが、あなたは其中どれに属するとお考えですか」の選択法に続いて、「お答えしにくかったと思いますので、今一度同じことを分かり易くお尋ねします。この目盛は階級の上下を示したものですが、あなたはどの辺の所だとお考えですか」という目盛法を使用して、比較考察を試みてみた。選択法による回答結果は、第3表の横の欄のように、中61%強、下33%強、分からない約5%で、上は皆無である。他方、目盛法の結果は、表の縦の欄のように、一部の層に集中せず、かなり上下に分散し、選択法ではみられなかった、上と判定されるものも若干現われており真実の階級意識に一層近いものが捉えられているかに思われる。度数分布の観点からみると、幾分下の方向に偏ってはいるが、大体正規分布に近く、上下の両極がほぼ対照的に現われている。関連分析から、目盛の7、8は上、4、5、6は中、1、2、3は下の階級に該

第3表 階級所属意識測定の見取法と目盛法との関連

目盛法	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	分な か らい	計		
	下			中			上					実数	%	
上	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
中	0	0	6	15	49	42	9	1	0	0	5	127	61.4	
下	2	8	29	17	13	0	0	0	0	0	0	69	33.3	
分からない	1	0	1	0	0	3	0	0	0	0	6	11	5.3	
計	実数	3	8	36	32	62	45	9	1	0	0	11	207	
	%	1.5	3.9	17.4	15.5	29.9	21.7	4.3	0.5	0	0	5.3		100

当する、とみなされるから、これを上中下に総括すると、中はほぼ67%で、見取法に比べて余り変わらないが、上が0から5%近くに増える反面、下が約23%とかなり減っている。その理由は、上中下の階級というような刺戟的な言葉の代わりに、1, 2, 3……の比較的中性的な記号を用いる時には、他人の思わくを考えて、実際の気持よりも控え目に答えよう、とする人々の気持を抑えて、比較的眞実に近いものを表明させているためと解せられる。この間の事情を一層明かにするために、見取法と目盛法との回答結果を関連づけてみると、同じ表のように、見取法で中と答えたものの中、目盛法では下の階級に下がったものが若干あるとしても、それより多くのもが上に変り、また下に所属するとしたものの中の43%強もの多くが中に変り、上昇の傾向が見出される。

4 I次元とASO測定

続いて、AGIL枠のIに対応すると、みなされる、社会調査の手法について述べてみる。¹⁸⁾ ASO (Assumed similarity of opposites) 測定と称される、一種の投影法が一応これに該当するのではないかと考えられる。工場の職長を例にとると、初めに、部下の中で一番すきな者1名、一番嫌いな者1名を念頭に思い浮かべ、その各について、種々の性質特徴から評価判定させ、それぞれ好悪の2人に与えられた得点の差を計算し、評価特性の全部にわたる差の合計からASO値が算定される。差の小なる時ASO値は大、その大きい時小とみなされる。ASOが如何なるものであるか、またそれが如何なる事柄に関連をもつかについては、まだはっきりしていないが、凡そ次のように解されている。それは、人に対する一般的な態度の指標であり、ASO値が大なる時(数値は小)には、人の近寄り易い性質人柄であり、一方小なる時には近寄り難い、といった類いのものであり、約言すれば心理的距離の大小を示すものである。それが適当であれば有利である反面、余りに小さく、または大に過ぎると不利であるというように、集団成績、産業面では生産性に関係があるともみられている。アメリカの某製鋼所の場合、職長のASO値が小さい方が担当職場の生産性が高い、という研究報告も出ている。

当面の主題である、I次元を組成する、型変数とのかかわりについて説明すると、自分のすき嫌いな部下ということでは、組成型変数複合の一つである、特殊主義・感情主義と相通じるところがあり、前記自由回答法と変りがないが、しかし、他面、究極において、その測定で意図されるものが、限られた、一時的の、心の中の欲望や感情の言葉行動への表出ではなく、そこから個々の行動が出てくる、本源たる、人が近寄り易いとか、近寄りにくいかといった、恒常的で、包括的な特性である限りでは、今一つの組成型変数複合である、拡散・属性とかかわりがある、といえるであろう。先年、筆者が名古屋市のトヨタ

第4表

工場	事項 職場	監督者 に対する 満足度	A S O 値
本 社	A	3.5	6.9
	B	2.9	8.5
中 川	A	3.5	7.4
	B	2.7	9.3
豊 田	A	3.6	4.1
	B	3.0	8.3

備考：満足度は5点満点，A S O値は数値が小なる程大。

自工の系列企業H社で試みた、A S O測定の結果を例として、説明を補足してみる。第4表のように、A S O値については、比較対照の職場の監督者の間には、

最低9.3 (A S O値はこの数値に反比例する) から、最高 4.1に至るかなりの差が認められ、かつ、例えば本社工場の職場AのBに対する場合の如く、従業員の監督者に対する満足度の高い方の職場では、低い方の職場に比べて、一貫してA S O値が大きい。これが何を意味するかは断定され得ないけれども、面接の際気づいたことでもあるが、部下は皆かわいい、嫌いな人は1人もないとか、特定の人だけをすきな人として考えることはできないとかいって、所要の回答を得るの

に、手間のかかった場合もあったことから察知されるように、監督者の中には、部下に対して差別をつけず、大らかな、一視同仁的な態度で接する人もあり、この種の人では、A S O値が大なるべき筈であり、そしてかような対人態度の監督者には、部下も満足すると思われ、これが、かように監督者に対する満足度とA S O値との間に関連が見出される一因ではないか、と解せられる。

今一つ、先年実施した但馬杜氏の調査の資料により、A S O測定と監督行動の諸次元との関係をしらべ、それが何を意味するかを理解するための手がかりにしたい。監督行動次元の中の、行動枠づけ次元と、A S O測定との関連分析を試みると、A S O値の大きい時には、枠づけ次元得点の大なるもの、換言すれば、いつも、またはしばしば仕事の期限間に合わせることをやかましくいうなどの類いの、監督の仕方が21%に過ぎないのに対して、他方、その小なる時、換言すれば、協力的か非協力的か、周到か軽率か、責任感が強いが無責任かなど、部下の評価に差をつける場合には、56%と半ばを超えるというように、監督行動の枠づけ次元とA S O値との間には、統計上も有意の関連性が検出される。そして、これから、行動枠づけ次元は生産本位主義とみなされている以上、A S O測定の結果が生産性とかかわりのあることが推測されるであろう。他方監督行動の今一つの側面であ

人間関係次元とASO測定との関係を見ると、ASO値が大きい時、すなわち部下を評価するのに差をつけず、一視同仁である場合には、人間関係次元得点の大きいもの、換言すれば部下を扱うのに、部下の気持を考慮するといった、監督流儀のものが半ばを超えるに対して、ASO値が小なる時には、反対に、他人の面前で部下をしかるような流儀のものが65%もあり、統計的有意水準に達しないとしても一定の方向の関連性が認められるが、この点からも、間接的ではあるが、ASO測定の意味するものが示唆されるであろう。

5 L次元と意味微分法

最後にAGIL枠のLに対応するとみなされる、社会調査の技法について考えてみる。価値志向的な内容の事項についての、選択法がすぐ念頭に浮ぶが、これは至極自明のことで、特に説明を要しないともいえるので、ここでは、高度の投影法でもある、意味微分法(SDT)と称せられる、一手法を取り上げてみる。

人を使う上で、指示命令を与え、これに従わせるやり方と、よく説得して協力を求めるやり方との中、いずれを選ぶか、という労務管理観に関するものであるが、その手法の要点は、一方における創意工夫する、ということのような、一般によいこととされるものと、他方における、間違いをする、ということのような、一般に悪いこととされるものについてのイメージを調べ、命令すると説得するとの中、もしいずれかが前者との差が小さい反面、後者との差が大きいならば、よいこととして選考されているものと推定するに対して、他方もし前者との差が大きい反面、後者との差が小さいならば、悪いこととして選ばれているものと、解するにある。約言すれば、もし説得するの方が命令するに比べて、一般によいこととされる、創意工夫するに一層多く似ている反面、一般に悪いこととされる、間違いをするとは一層多く違っているならば、よいこととして選ばれているものと判定する

第5表 他の概念を媒介とする命令対説得のイメージの国際比較

比較概念 国	創意工夫する	間違っている
西ドイツ	1.01	-1.56
スウェーデン	0.51	-0.59
イギリス	-0.16	-0.23
アメリカ	-0.31	-0.16
アルゼンチン	0.14	-0.34
日本	-0.04	-0.27
酒造経営主	-0.33	0.22

備考：正の数値が大きい程命令に類似し負の数値が大きい程説得に類似する。

にある。L次元を組成する型変数複合と関連づけてみると、ここで主題である、労務管理上の考え方流儀が、価値志向的なものとしてその組成型変数複合の一つである、属性・拡散とかかわりがあるのはいうまでもなく、また、たとえ回答者本人にとっては必ずしも意図的とはいえないとしても、ともかく自分一個の主観や好みではなく、創意工夫する、間違いをする、という一般的な価値基準によって、冷静客観的に判定がなされている限りでは、今一つの組成型変数複合である、没感情主義・普遍主義とも共通するところがあると考えられる。かく考えるならば、この社会調査の手法をL次元に比定しても不当ではないと思われる。

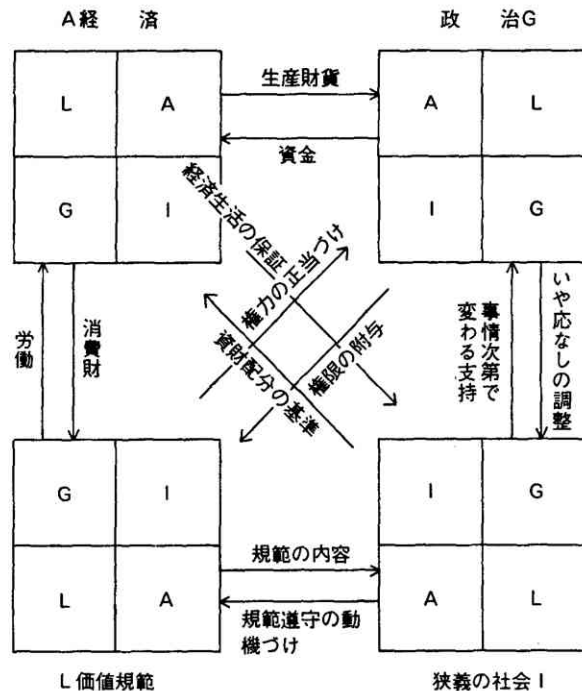
M. ヘアー達の実施した、世界の主要国の経営者の

⁽⁹⁾ 労務管理観の調査や筆者が全国酒造経営主を対象として実施した同じ調査の結果の中から
⁽¹⁰⁾ 1例をあげてみる。第5表では、正の数値が大きい程、命令するに類似し、負の数値が大
 きい程、説得するに類似することになっており、従って、我が酒造経営主を考慮の外にお
 くなれば、よいこととみられている、創意工夫するでは、少なくとも全体の平均では、正
 の数値になっている反面、悪いこととされている、間違いをするでは、悉く負の数値であ
 ることよりすれば、普通一般に行われている直接法で、むしろ説得の方がよいこととして
 選ばれているのは異なり、先進国と発展途上国とを問わず、世界の経営者の考え方には
 案外まだ古いものが残っているとも解されるであろう。しかしながら、アメリカは、負の
 数値が間違いをするでは最小である一方、創意工夫するでは、我が酒造経営主以外では、
 一番大きいなど、さすがにこの分野における先駆者的地位の片鱗をみせているといえる。
 他方、直接法では、部下従業員の内発的自覚に訴える、統御管理で首位を占めるなど、か
 なり近代的とみなされる、北欧諸国、とりわけ西独において、意外にも、創意工夫するで
 は正の数値が際立って大きい反面、間違いをするでは、負の数値が著しく大きいというよ
 うに、説得するに比べて、命令するの方がより多くよいこととして選ばれている、と推定
 されるのは、命令服従主義を尚ぶ、歴史的文化的風土の特質を露呈するものともみなし得
 るであろう。

6 交換理論、段階論とその適用

以上の考察によりもともとその経験的研究への適用が意図せられてもいる、パーソンズ
 の理論、特に理論枠AGILの妥当性有効性が検証せられると共に、今日一般に用いられ
 ている社会調査研究の諸手法が一般理論的にも特徴づけられ、またこれを通じて、それぞ
 れによって捉えられる事実や意識の異なった面や層に対する理解が深められ、かくて理論
 と実証との統合が一步進められるところが少なくないといえるであろう。なお、以上の考
 察では、理論枠AGILは一応行為体系の機能次元として扱われているが、なお、これを
 社会体系や文化体系の次元と解する観点からの経験的適用も可能であり、私なりに若干試
 みてもいる。更にパーソンズでは、下位体系(Subsystem)の発想を経て、交換(Inter-
⁽¹¹⁾ change)理論が展開せられており、その歴史研究などへの適用も試みられている⁽¹²⁾。この
 理論は、実証的研究の側からも、今後効果的なものとして評価されねばならないと考える
 ので、不十分ながらその概要を記してみる。前提の第一は、影響、作用、要因の観点から
 社会現象を考察する場合、唯物史観等の如く、根本要因、基盤として特定の現象に重点を
 おくことなく、社会諸現象を軽重の差なく、同じようにみようとするにある。今一つの仮
 定は、以上と矛盾するようでもあるが、社会体系が順次下位体系に引き下げられる場合、
 これら下位体系次元については、数多くの相互作用関連形態の中、特定のものを重視する、
 換言すればそこに一定の規則性の存在を認めようとするにある。出典はどれとはいえない
⁽¹³⁾ が、関係諸文献を参照して作成した、第2図により、さらにその要点を説明してみる。先

ず、4つの大きい方の箱形は、包括的な社会体系の下位体系である、それぞれA, G, I, Lに対応する経済, 政治, 狭義の社会, 価値規範であり、さらに、これら各は同じく、小箱形の下位体系A, G, I, Lに引き下げられる。交換理論の要点は、一次の下位体系間の相互の投入投出、約言すれば交換に一定の規則性の存することを仮定するにある。詳言すれば、経済と政治、及び価値規範と狭義の社会との間では、二次の下位体系次元の中、例えば政治からの資金の投入に対する経済からの生産財貨の投出という如く、AとAとの間の投入投出、すなわち交換に重点があり、続いて、経済と価値規範、及び政治と狭義の社会との間では、G, G間、また経済と狭義の社会、及び政治と価値規範との間では、I, I間の交換が重要であると考える。



第2図 社会の下位体系間の交換

すぐ気づかれるように、たとえ組成型変数による一応の規制、判定基準があり、大枠はきめられているとしても、レベルの違う下位体系の各次元に、いかなる具体的内容を与えかが明確でなく、従って恣意的になり易く、空箱呼ばわりされてもいるが、しかし純理論としてはともかく、経験的研究上は一応の指針として役立つと考えられ、筆者も消費調査の結果や社会病理関係の統計資料の分析に適用する傍ら、その量的検証を試みている。なお、今日この種の経験的研究が期待される理由もあり、それは、最近、パーソンズの交換理論に対しては、自分自体は除き、互いに相手の下位体系機能次元の中自己体系を特徴づけるのと同じ次元間、例えば経済と政治とでは、G, A経済と狭義の社会ではI, A経済と価値規範ではL, A間の交換に重点をおく異説が提起せられているが、これらの当否の判

定は単に理論だけではなく、実証的な検討によらねばならない、と考えられるからである。

なお、一般には余り注目されていないようであるが、ベールズの実験研究から帰納構成された相互作用の範疇を基礎とする七段階論も、理論の経験的適用の観点よりすれば、見逃さるべきではなく、既に社会化の分析や歴史研究に応用せられてもおり、筆者も、昭和の初年盛衰興亡の理論に関心をもった際¹⁵たまたま読んだ慈門の『愚管抄』の時代区分が7つであることを思い出し、これをパーソンズ理論と引き合わせてみたところ、意外にも、時代区分の数だけではなく、各時代の特徴づけもよく似ており、概ね彼の理論通りであることを知り、驚いた次第であり、考証をまとめてみたいと思っている。

2 社会化理論の適用としての三島由紀夫論

昭和45年の晩秋、社会病理の講義で犯罪、離婚等がすみ、自殺の話をしていた時、たまたま三島由紀夫の自殺事件が起り、これに言及しない訳にもゆかなく、それまでは全く関心のなかった三島の作品を読み初めたが、これがきっかけになり、この一文を書くことになった。昭和初期の異常な時代相のなかでの、明治36年生れの筆者など、少なくとも大正デモクラシー時代を経てきた者とは対照的な、昭和元年生れで、いわば昭和の時代と共に人生を歩んできた、三島由紀夫の生活体験に注目し、その考察分析にパーソンズの、前述の型変数や機能次元とも関連のある社会化の理論の適用を試みようとするのが本稿の狙いである。

1 社会化の理論枠とその適用の要点

初めに、社会化理論の要点を述べると、社会化とは、個人を社会の規範、文化に適應させる媒介作用を意味し、そしてこれは、(1)、社会規範からはずれていたとしても、これを厳しくとがめることなく、大目にみてやる(2)、相手を手なづけ、特別の関係を作るため、事の如何を問わず支援助力を与える(3)、様変わりして、増長した相手のよからぬことへの誘いは断然拒否する(4)、社会化の役割を担う者の立場から、是非のけじめをつけ、特によい方へのきざしは評価してやる、の4つの態様、位相に分けられる。この理論枠と行為体系の機能次元A、G、I、Lとの関係は、一応第1図の如く、普通にみられる、課業の処理解決過程における、時計回りとは反対に、学習過程として逆時計回りである、すなわち、社会化の態様たる、寛大、助力、応答拒否、賞罰操作はそれぞれ機能次元位相L、I、G、Aに対応する。¹⁶尤もパーソンズでも、かかる対応関係は、社会化過程をフロイトの精神分析における精神・性発達過程に比定した場合に判然しているだけで、社会化、学習を、社会規範の内面化や、情報対心情の投入投出メカニズムの面からみた場合には、必ずしも逆時計回りとはいえないが、それは社会化を担う者の立場にたつか、それとも対象者からみるかの観点の相違によるものと考えられる。また、ここでは、社会化の意味を、幼年期に限らず、少年期や青年期にわたるものと解する。なお、本稿で考慮される理論は、研究対

象の性質上、単にパーソンズの社会化理論のみならず、広く精神分析学、社会心理学の理論にもわたることを予め断っておく。研究領域が専門外の文学にわたるので原文の解釈や参考文献の渉獵選択に難点が多かるべく、読者の御寛恕を乞う次第である。

本稿の論旨を予め要約すると、三島由紀夫における、最後の自殺行為にもつながる、異常な時代相の内面化のメカニズムと、その先行条件過程たる、生得的資質や幼時の生活環境の考察にあるが、先ず前者の内面化から初める。満洲事変に初まる、日本の行動は、今日からみれば全く沙汰の限りで、狂気という外ないものであったが、これに対して取られる対応の仕方、態度には種々あるが、先ず第一に、同調、時には同調過剰ということが挙げられる。これは、本心はとも角、表面の言動では、国家の常軌を逸した行動にも無批判に従い、さらにはそうしない人を非国民呼ばわりするなどの態度であり、大部分の人々の間にみられたものである。次には、恰も木かげに、一時、雷雨を避けるという如く、国家の狂躁の状態が静まるのを待とうとする、逃避の消極的態度があり、同調に次いで多かったのではないかと思われる。その頃の拙文にも「現時の抗し難き苦難、災禍、抑圧に対しては、恰も風伯雨師の暴威に対する如く、無抵抗裡にその過ぎ去る時を待たんとする諦めの念も亦人々を宗教に誘い込む²⁰⁾」とある如く、当時流行した数多くの新興宗教は、かような、人々の現実逃避の現われではなかったかと思い出される。さらに、少数ながら、超国家主義の排外侵略行動に向けられた、自由主義者、反戦主義者、キリスト者の抗議反抗の態度も見逃されるべきではない。最後に残る対応の仕方は、当時の国家行動、時代相やその主導原理を、他人事ではなく、外ならぬ自分自身の事であり、他から押しつけられたものではなく、自己の内心により選択されたものとする。約言すれば社会的客体の同一化、内面化の態度であり、恰も三島の場合にあてはまる、ということができる。こじつけのように思われるかもしれないが、彼の処女作『花ざかりの森』の中の、京で宮仕えをした女が男と紀伊に下り、暫く潮さいに胸をさわがせて、うちふしながら、一日海辺に出かけてのくだりの「おおわたつみはもはや女のなかに住んでしまった」という文章には²³⁾ いかにもよく作者における、狂気の、修羅の外部客体の内面化の状況が、象徴的に描かれているように感じられる。なお、昭和17年の大詔と題する詩の中の「時しもや南の海、言挙の国の首に、高照らす日の御子の国、流涕の剣は落ちぬ」あたりからは、一層明瞭に内面化の態度が読みとられるであろう。対応の仕方は種々あるなかで、何故三島では内面化が選ばれたか、そこには如何なる要因が作用しているかの探究が次の課題になる。

2 少年期の社会化

内面化の規定要因は、生来の資質と生活境遇とに大別されるが、後者の生活歴から初める。先ず、昭和元年生れのため、物心がつき、社会に対する目が開けた年頃、接したのは、超国家主義、ファシズム、その特殊日本的形態としての皇道主義であり、これと対照される個人主義、自由主義、人道主義で特徴のある、大正デモクラシーを実際に体験しなかつ

たことも、内面化の一要因であると考えられる。他方、これとは対照的に、坂口安吾は、戦争のさなか、異色の『日本文化私観』を書き、戦争直後は、社会秩序の根本原理として個人主義、人間主義を提起する一方、天皇制を批判したが、²⁵彼が明治生まれで、大正デモクラシーに対する実体験があったことはその一要因であるように思われる。

次に問題になる生活歴の面は、主題の社会化理論の適用とかがわりのある、少年期で経験した、順調な社会化の過程である。本来の社会化よりすれば、幼年期が肝要であるが、検証資料などの関係から、その考察は、後段の生来の素質の項で合わせ行なうことにする。さて、前述の社会化理論で提示されている、それぞれL、I、G、Aに対応する4態様位相の中、初めの2つは、そのまま適用可能で、効果的でもあるといえる。先ず、第1位相の、社会規範からの逸脱や過誤をとがめることなく、大目にみてやる、という寛大については、恰好の資料があり、その有効性が検証される。三島の両親、平岡梓氏夫妻の共著『伴・三島山紀夫』には²⁶、幼時から文字を覚え、詩も作ったりした関係から、小学校では、子供ではなく、全く大人の感覚で書くので、子供らしくないとして、先生方には受けが悪く、作文の点は却ってよくなかったが、中等科になると、幸い国文の岩田九郎先生に才能を認められ、作家としての素質が俄然現われるようになり、有り難く感謝している、という意味のことがみえている。かように社会化の理論枠が内容からみて裏づけられるが、なお構成単位からみても、その妥当性が検証されるといえる。岩田先生の場合は、子供のくせになどと感情的にならず、作文自体の出来ばえで評価し、また年齢だけに捉われず、広く才能の伸びなどにも目をとめようとする点で、L次元を組成する型変数、没感情主義、普遍主義、拡散と相通じるところがあり、従って社会化の態様としての寛大をL位相に比定することの妥当性が裏づけられる。

次は、三島本人だけではなく、在学した学習院の教師学生全体にかかわることでもあるが、鬼畜米英撃滅などの標語が使われたり、或る名流婦人が、日本軍の捕虜になった英兵のことを「おかわいそうに」といったとかで、問題になったり、また古典では、『源氏物語』や『新古今集』などは軟文学として斥けられる反面『記紀』、『万葉』が尚ばれた、偏狭な国粋主義軍国主義の風潮のなかで、学習院は、歴代、陸海軍の長老を院長に戴き、時の政治権力の干渉を受けない、いわば文教上の独立地帯でもあったので、戦時中も純文学雑誌「文芸文化」の刊行が続けられたのである。後年マルキストになった人も、当時は万葉集を読まされ、これに傾倒したり、また外国語の教師が学生と万葉の歌を朗唱したりするといった、戦時下の厳しい雰囲気の中で、学習院には、『源氏物語』や『古今集』など純文学の研究に専心することの出来る、大らかで寛容な気風がみられ、とりわけ三島の場合は、生徒でありながら、昭和16年処女作品『花ざかりの森』を学内雑誌に発表したり、先生方の研究会に出席することを許されたのである。その頃三島は、先生方の影響と、²⁷生来の資質から王朝文学を通じて一貫して唯美を追求しており、そしてこの唯美主義こそ

は、その普遍主義的性格の故に、一部分保田与重郎、伊東静雄などの日本ロマンティズムとのかわり²⁸はありながら、三島文学をして、西洋文学と相通じるところがあり、西洋人にも理解され得るものにする²⁹と共に、戦後社会の変貌にも拘らず、そのまま作家として成長してゆくことのできた理由と考えられる。次には、社会化の第2の態様位相である助力の観点から考察を試みてみる。一般社会との関係からはとも角として、先生方との関係からすれば、以上述べたところは、寛大に止まらず、助力ともみられる点もあるが、次にははっきり助力とみられるものについて記してみる。何分模範生である三島の場合には、逸脱非行から正常健全に引き戻そうとする、本来の社会化のメカニズムはよくあてはまらず、書きにくのであるが、学習院生活での上級生との関係から、一応の手がかりがつかめそうである。恰好の三島回想文である『焰の幻影』の著者、坊城俊民氏からは、文芸部の上級生として、三島は機関誌への投稿などで色々世話になった。しかもその関係は単なる先輩後輩の関係ではなく、その頃学習院で盛んであった、稚児遊びという類いのものであった。稚児遊びは、男色と呼ばれるようなものではなく、「むしろ初恋よりも淡々しい、思春期の一種なまめかしい情緒があり、また、三島12歳、坊城20歳、2人を結びつけたものは肉身にめぐり逢うたようななつかしさとでもいえるものである²⁹」とするならば、そこには助力が比定される、I次元の組成型変数たる属性、拡散、特殊主義、心情主義が充たされており、従ってその関係は社会化の理論からみて一応助力といえるものである。ついでにいうならば、逸脱過誤から正常に引き戻すという、本来の社会化の一態様としての助力に関してであるが、我が国でも早くこれに気づかれており、例えば、『葉隠』には、「人に意見を³⁰して疵を直す³¹と云ふは大切の事、大慈悲、御奉公の第一にて候。……意見と云ふは、先づその人の請くるか請けぬかの気をよく見わけ、入魂になり、此方の言葉を兼々信仰ある様に仕なし候てより、好きの道などより引き入れ、³⁰」とあり、相手の非をいい立て、恥をかかせるのではなく、初めは、遊びや道楽と一緒にやるなど手なづけ、折をみてよい方に導くのがよいと教えている。

今一つ、坊城家の書斎で、氏が中学低学年の三島に、『源氏物語』の右大臣家の藤の宴における、光源氏の類い稀な姿、振舞について語った際、三島は「それはすばらしいお言葉³¹です」といった、ということであり、われわれには異様に感じられる。このことは、父方からは、摂津加古川在の農家出である、三島の上昇志向からの、公家華族の坊城先輩に対する、尊敬、追従とも思われるが、しかし稚児遊び、それも子の親や尊族に対する言葉と解すれば、強ち不自然ではないであろう。

続いて社会化の第3の態様位相である、応答拒否についていうと、これは、本来逸脱からの正常への転向の仕組みを主眼とするものである以上、三島の場合には適切でない、といえるが、しかし青少年期の彼の人生経験には、いくらかこのことを思い出させるものがある。彼が「文芸文化」を通じて、私淑していた、日本浪漫派の詩人伊東静雄との関係が

丁度これに近いのではないかと思われる。昭和19年、処女作『花ざかりの森』の序文を伊東氏に断わられた、ということであり、³²⁾ 別によい方へ導いてやろうという意図があつてのことではなく、むしろ感情的にはあつたとしても、三島よりすれば、真剣に傾倒私淑する人から拒否された、という経験が、その後の彼の人格に何らかの影響があつたのではないかと、とも想像される。しかし、他面からみるならば、三島では、社会化の位相の中、前半の寛大と助力には著しいものがある反面、後半の応答拒否と賞罰操作には見るべきものがなく、³³⁾ 本人もいっているように「いつまでも甘ったれの坊ちゃん気質が抜け切れず」その結果、文学と思想、換言すれば鍛えられないまま早くかたまつた人格と、変貌する社会環境との相克断絶を生じ、³⁴⁾ 遂には人格の破滅に至つたとも考えられる。

3 幼年期の社会化

かような見方もできるが、少なくとも三島少年においては、その出会つた社会や時代相の同一化、内面化がなされ、さらに、陽明学などによる正当づけの、自主自立へと進んだものと解したい。そして、この内面化の要因を、この点で最も重要な幼年期、さらには先天的素質にまで遡つて究明するのが次の課題になる。先ず、幼年期の社会化から初める。祖父と父とは共に、東大出の高級官僚であつたが、出自は、兵庫県加古川在の農家であるのに対して、祖母は、幕府最後の若年寄永井玄蕃頭を父とする、ということもあつて、家のことは、万事祖母の考え通りで、とりわけ初孫の三島（平岡公威）³⁵⁾ は学校に行くまでは、遊び友達には近所の女の子供があてがわれ、祖母の部屋で暮らすのを余儀なくされた。その結果、母の傍におれない、自分の好きな友達と遊べない、自由に外へ出られない、好きな遊びができないの欲求不満が累積した。その反応形態には、抑制（我慢）、攻撃行動、転移、反動形成、退行、昇華があり、一時ははたきや物差しを部屋の中で振り回すといつた、³⁶⁾ 攻撃行動もみられはしたが、加賀藩の儒家出の文学少女であつた母が、祖母の部屋で幼い時から本を読んで聞かせたり、文字を教えたり、文を作らせたりしたので、シンボルの世界ながら、好ましい仕方で欲求不満が処理解消されることになった。約言すれば昇華が選ばれたのである。そして、かような抑圧的で、不自然な生活環境におかれながら、予想されるどころとは異なり、逸脱者、不平家や体制変革主義者ではなく、国体護持の文学者三島由紀夫が育つたについては、母の、慈愛は勿論、シンボル行動で、欲求不満を昇華させるという、賢明な才覚があつたためというべきであろう。

なお、社会化の領域を越えて、生来の素質ともかかわりがあるようにも思われるが、母との間の愛の結びつきが極めて強く、異常、変態、エディプス・コンプレックス的ともいえる程であり、例えば幼時から作品は、発表前に必ず母に見せ、この習慣が死の直前の『豊饒の海』第4巻『天人五衰』まで続き、また母も『暁の寺』では、仏教々理を理解するため早大の仏教講座を聴講されたという。なお、この母への愛は、既に3歳頃、家での、祖母に対する母の受け身の立場に気づき、母のことを口に出すのを控える、という思いや

りからも察知される、と母本人が述懐しておられる。⁽³⁵⁾

4 生来の素質

最後に、狂気の現実社会の内面化の要因の中、残る生来の資質について考察したい。事柄の性質上、ここで適用される理論は、厳密には社会学よりも、社会心理学、精神分析学の領域に属するものである。この種の精神分析学的理論の要点を記してみる。人間には生来の本能欲求と共に、死の本能欲求が存し、後者が優勢な場合に自殺が生ずる。自殺は複雑な死の形態であり、(1)、殺したい(2)、殺されたい(3)、死にたいの3つの要素が共に作用して、自殺が完全に遂げられる。何故人間に死の欲求が存するかを根拠として、人間の根本的な本能の1つとしての回帰が挙げられる。進化の過程において、たまたま外部の力が作用して、原初の無機物が生命のあるものになったのであるが、人間にはこの始原の状態、すなわち生命のない状態に帰ろうとする、回帰本能があるところから死の欲求が生ずる、とされる。⁽³⁷⁾ かような仮説を念頭において、三島の幼時の生活経験に当ててみる。先ず、他人の事に托して書かれた自叙伝とされる『仮面の告白』が資料となる。尤も作者が予め精神分析学的理論を心得ており、これに合わせて自分の生活歴を描いた、とみられる疑念がないわけではないが、悉くが仮作であるとは信じられない。幼時、自分が生れた時の光景を見たことがあり、特に産湯を使ったらしいのふちのところにはほんのり光りがさしていたのを覚えている、といい張り、それがたまたま客の前でいい出されたりすると、白痴と思われかねないことを心配した祖母が、むこうへ行って遊んでおいでといったとか、⁽³⁸⁾ 5歳の頃、肥桶を前後に荷い、足で重みを踏みわけながら坂を下りてきた、汚穢屋の姿に異常に惹きつけられ、彼になってみたい、という欲求にしめつけられた、と幼時の体験が細かに書かれている。糞尿は大地の象徴であるから、私に呼びかけたものは、根の母の悪意ある愛であったに相違ない、と三島自身解釈しているように、後年修羅の外部客体との同一化が可能になり、最後には自殺に導いた、死への志向は、既に幼時芽ばえてもいた、生得的性向ともいえるものに深く根ざしていた、と考えられる。続いて、自分が戦死したり殺されたりしている状態を空想することに喜びをもったとか、自分が撃たれて死んでゆくという状態にえもいわれぬ快さがあったなどと、幼時の死の願望にも、三島は言及している。⁽⁴⁰⁾ さらに、一層検証性のある、裏づけ資料を挙げると、小学1年生の時の作品に、

コウエフノアキノオヤマノハガチルヨ シヅカニシヅカニチラチラチラト アキノカ
ゼ木ノハガチルヨ山ノウヘ

というのがあり、この歌について母上が、なぜ散ることばかり書くのでしょうか、いぶかっておられるように、⁽⁴¹⁾ そこには母なる大地への回帰、死への志向がみられる。また、12歳の少年期の作であるが、

猫の喰べ残した鼠は、
湿った枯葉の山にある。

其の上に、枯葉の落ち合ふ音は、
——灰いろの挽歌のやうだ、

という奇妙な詩があり、これは、彼が眼前にみた日常の秋の情景ではなく、彼の幼年体験の記憶のどこかに刻みつけられていた原情景といったものが、秋の寂莫の情感に触発されて形成されたイメージに違いない、と評釈されているように上記の作品につながるものと解されるであろう、

今一つ、前述の他人に托して自分を描くという手法の『仮面の告白』程には意識的意図的ではないとしても、自分の思うところが自ずと他人事に投影されているということで、同じようにもみられる、16歳の時の作、前記『花ざかりの森』には、「殺される一步手前、⁴²⁾殺されると意識しながらおちいるあのふしぎな恍惚、ああした恍惚のなかに女はいた」、また18歳の時の作『中世における一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃』には、「北の方瓏子を殺害。……彼女はむしろ殺されることを喜んでいるものようだ」、「殺人者は造物主の裏、その偉大は共通、⁴³⁾」とある、これらは、当時の異常な社会状況の落した影ともみられる一面があるとしても、やはり幼時の原体験、生来の性向、換言すれば死の願望につながるものとみるべきであり、かくて内在的性向と外部客体の傾向とが一致することにより、狂気の現実社会の内面化が可能になると共に、筆者の三島研究のきっかけとなった、彼の自殺についても一応の解明がなされることになる、

注

- (1) Colin Fletcher, *Beneath the Surface*, 1974. Robert K. Merton, *Qualitative and Quantitative Social Research*, 1979は示唆に富む。
- (2) Talcott Parsons, *Toward a General Theory of Action*, 1951.
- (3) T. Parsons, *The Social System*, 1951, p.141.
- (4) A. H. Barton, *The Concept of Property-Space in Social Research*, in Paul F. Lazarsfeld, *The Language of Social Research*, 1955, pp. 40-53.
- (5) 拙著『経営理念の社会学的研究』晃洋書房、昭和51年、86頁。
- (6) T. Parsons, *Pattern Variables Revisited*, *American Sociological Review*, 1960, pp.567-83. Max Black, *The Social Theories of Talcott Parsons*, 1961, p.331.
- (7) T. Parsons, Robert F. Bales and Edward A. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*, 1953, p.182. T. Parsons, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, 1977, p. 45.
- (8) Fred E. Fiedler, *Leader Attitudes and Group Effectiveness*, 1956, pp. 16-17. Jum C. Nunnally, *Tests and Measurements*, 1957, pp. 394-95.
- (9) Mason Haire and others, *Managerial Thinking*, 1966, p. 159.
- (10) 拙著『酒の社会学的研究』ミネルヴァ書房、昭和47年、227～228頁。
- (11) T. Parsons and Neil J. Smelser, *Economy and Society*, 1956, pp. 68-80. T. Parsons, *Politics and Social Structure*, 1969, pp. 397-404; *Action Theory and the Human Condition*, 1978, pp. 381-414.
- (12) N. J. Smelser. *Social Change in the Industrial Revolution*, 1959, pp. 1-49. Kenichi

Tominaga, Growth, Development and Structural Change of the Social System, in Loubser and others, Explorations in General Theory in Social Science Vol. 2. 1976, pp. 681-712.

- (13) Guy Rocher, Talcott Parsons and American Sociology, 1974, p. 92.
- (14) Mark Gould, Systems Analysis, Macrosociology and the generalized Media of Social Action, in Loubser and others, op. cit., pp. 470-506.
- (15) T. Parsons and R. T. Bales, Family, 1956, pp.359-388. Ken Menzies, Talcott Parsons and the Social Image of Man, 1976, pp. 115-118. (16) N. J. Smelser, op. cit., pp. 28-42.
- (17) 拙稿『盛衰興亡の理法』, 「社会学徒」, 第10巻第1号, 昭和11年。
- (18) T. Parsons and R. T. Bales, Working Papers in the Theory of Action, pp. 232-245; Family, pp. 38-42.
- (19) 日本文学の社会学的考察としては, 川本彰『近代文学に於ける「家」の構造』社会思想社, 昭和48年がある。
- (20) 拙稿『一社会学徒の世相断想』「社会学徒」, 第11巻第3号, 昭和12年。
- (21) 角家文雄『昭和言論史』昭和46年, 18-41頁。
- (22) 同志社大学人文科学研究所, 『戦時下抵抗の研究Ⅱ—キリスト者・自由主義者の場合—』昭和44年。
- (23) 三島由紀夫『花ざかりの森』, 『花ざかりの森・憂国』, 新潮文庫, 昭和43年所収, 30頁。
- (24) 小高根二郎, 『伊東静雄と三島由紀夫』, 長谷川泉, 森安理文, 遠藤祐, 小川和佑, 『三島由紀夫研究』昭和45年所収, 205頁。
- (25) 坂口安吾『墮落論』角川文庫, 昭和32年, 93, 98-101頁。
- (26) 平岡梓『倅・三島由紀夫』文芸春秋社, 昭和47年, 50頁
- (27) ジョン・ネイスン, 野口武彦訳『三島由紀夫—或る評伝—』昭和51年, 40-43頁。
- (28) 小高根二郎, 上掲書, 201-212頁。
- (29) 坊城俊民, 『焔の幻影—回想三島由紀夫—』昭和46年, 9-13, 53-55頁。
- (30) 『葉隠』上, 岩波文庫, 昭和15年, 28-29頁。
- (31) 坊城俊民, 上掲書, 33-35頁。
- (32) 長谷川泉, 武田勝彦『三島由紀夫辞典』昭和45年, 201-212頁,
- (33) 三島由紀夫『私の遍歴時代』昭和39年, 13頁。
松本徹『日本浪漫派と戦後』, 「国文学, 解釈と鑑賞」, 第44巻1号, 昭和54年。
- (34) 池田純溢『「憂国」「英霊の声」に於ける思想性—天皇制ナショナリズムの萌芽—』長谷川泉他
上掲書所収, 339-350頁。
- (35) 平岡梓, 上掲書, 46頁。(36)上掲書, 50-51頁。
- (37) Karl Menninger, Man Against Himself, 1938, pp. 23-73.
- (38) 三島由紀夫『仮面の告白』, 『現代日本文学館』42, 文芸春秋社, 昭和41年所収, 280頁。
- (39) 上掲書, 283頁。
- (40) 上掲書, 291, 293頁。
- (41) 平岡梓, 上掲書, 147, 151頁。
- (42) 小川和佑『三島由紀夫少年詩』潮出版社, 昭和48年, 16-18頁。
- (43) 三島由紀夫『花ざかりの森』上掲書所収, 31頁。
- (44) 三島由紀夫『中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃』上掲『花ざかりの森・憂国』
所収, 46頁。